

# 保育者・小学校教員養成における読書の量的・質的評価 ーダイナミックスキル理論に注目してー

広島女学院大学 細 恵子

キーワード：ダイナミックスキル理論、読書力評価、読書日記

## 1. 問題の所在

筆者は大学生と関わる中で、本を自分で選んで読んだり目的に応じて本で調べたりする習慣や読解力を身に付けていない学生が多いという課題に直面している。東城ら（2022）も、実践を通して「授業・レポートに関連した書籍を閲覧するために大学図書館を利用する学生が年々減少している傾向も感じられる。」「長文を読み切る忍耐力や文章読解力が低くなってきているように感じる。」と指摘している（p.67）。これらの原因として、選書の仕方や本の読み方を理解して活用すること、読書の良さを実感することができていないことが考えられる。

これまで、大学の初年次の授業においては、読むことと書くこととを関連させた実践、読書意欲の向上や読み方の習得を目指す実践が行われてきた。

東城ら（2022）では、年間を通じて読書カード（著者・タイトル・出版社・出版年・読書期間・感想＜◎○△＞を記載する読書記録）の実践を継続するとともに、絵本紹介ポスターや読書新聞の作成を取り入れることにより、学生の読むことへの意識が高まったという成果が示されている。峰本（2022）は、選書能力や読解方略を紹介しトレーニングを行うリーディング・ワークショップに基づき、自由読書の授業を通年実践している。授業の第1段階では、教員によって指定された本を全員が読みブッククラブを実施し、第2段階では、新書に限定し自由に選択して執筆するレター・エッセイ、第3段階では、読む本のジャンルを自由に選書して執筆するレター・エッセイに取り組ませている。

読書に親しむことや長文を読んで理解することができにくい学生の変容を目指すためには時間がかかるため、東城らの年間を通した書く活動、峰本のスキル面の指導・段階的な指導には注目できる。しかし、東城ら、峰本は、読書の意欲を高めることはできたものの、習慣化までには至っていないという課題を挙げている。

牧（2015）は、ノンフィクションに焦点をしばり、

あらまし読みと2冊比較読みを記録する「ヒト・テキストとの対話ノート」（p.40）、文章の読み合い、新聞学習、4つのテーマから作成するレポートとその交流を授業に取り込んでいる。これらの実践も峰本のよう、読みのスキルの習得を目指すことができると言える。しかし、学生のレポートの序論・本論・結論のうち結論の記述文字数の変化に注目し、記述量の増加を成果として示しており、「質的な調査は今後の課題である」（p.41）と述べられている。山田（2013）では、本に親しませること、解釈してイメージする力を育成すること、読書意欲のさらなる向上を図ることを目指して、1冊の本を仲間と共に読み合い、疑問や感想を交流し合うという活動を取り入れている。毎回の授業で、小見出し、心にとどめておきたい内容、章の感想について書かれた記述シートからは、「登場人物への共感・自分の率直な感想・驚き・疑問・今後の展開への期待・物語で起こっている事と現実との比較・自分自身の行き方の振り返り・物語の内容から編み出した自分なりのイメージ・次章の展開の予測・登場人物への願いなど」（p.145）が記述されたと示されている。しかし、これらは、全体的な成果であり、一人一人の変容を捉えたものではない。また、授業の感想については7項目の内容が量的に分析されている。

篠崎ら（2022）は、批評を行う活動を取り入れている。小学校から高等学校までの国語教科書に掲載された文学作品から各グループで任意の賞を設定させ、候補作を選定させた後、その中から大賞を1作選ばせ、候補作を含むすべての作品の選評を書かせ、クラスで1冊にまとめさせている。分析では、中間レポートと期末レポートの批評文を比較し、変化が大きかったグループ内の会話に注目している。この研究では、批評文の質が大きく変化した学生の文章が抜粋されており、取り出した情報と解釈を結びつける理由づけや作品のメッセージが記述される等の批評文の質の向上が確認されたとしている。一人の学生の文章の内容に注目して、以前と比べ何がどのよ

うに変容しているのかを捉えていくことは、個の力を伸ばしていくために重要であると考え。その反面、「変化があまりみられなかったグループの様相は把握できていない。」(p.177)という課題も挙げられている。

以上のように、学生の文章を評価する際、量的評価を行う実践や学生全体の傾向を捉える実践、大きな変容のあった学生・グループに焦点を当てて質的な変容を捉える実践が見られる。

読書に関する評価では足立(2020)に注目したい。足立は、アメリカのパートナー読書In2Booksの方法を用いて、大学生・大学院生と小学校2年生が1年間に5つのジャンルの本を読み、5サイクルで手紙のやり取りをするという実践を行っている。そして、児童の読書への親しみや思考力、書く力等をIn2Booksの6段階のルーブリック(観点と尺度からなる評価基準)で評価している。その結果、手紙をルーブリックで評価することは可能であることを示している。しかし、「前のサイクルの返事にかかれたパートナーの呼びかけを受けて返答を今回のサイクルで書き込んでいるという場合、そのことをうまく評価できなかった。」(p.141)と述べられているように、一連の流れを評価することができないとしている。この実践では、ルーブリックという評価基準を用いて1サイクルごとに評価が行われているが、一人一人がどのように変容したかについては触れられていない。また、児童に評価を伝えたかどうか、児童が自分の伸びを実感できたかどうかは不明である。

読書意欲を高めることや読み方を習得することに向けては、以上の複数の実践のように、本・テーマの選定、書く活動や話す活動との関連、人との交流等が必要であるが、読書の習慣を身に付けること、本の読み方を自分で選び、読書の良さを実感することができるようにするためには、それらを達成させる読書活動の選定、量的な評価と共に一人一人の質的な変容を捉える評価が求められる。

保育所保育指針解説では、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」(p.262)、小学校学習指導要領では、「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童の

自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。」(p.23)と示されている。

子どもたちが本に親しむことができるように促す支援や、主体的に読書ができるように導く指導力を、保育者や小学校教員になろうとする学生に身に付けさせるためには、まず大学の授業において、評価方法を明確にして学生の読書力を伸ばしていく必要がある。

## 2. 研究の目的と方法

### 2.1. 研究の目的

本研究では、2022年度前期2年生専門科目「国語」で実践してきた読書日記の中から学生Aの読書日記を抽出し、以下の2点を研究の目的とする。

- ①個の読書力の量的・質的変容をカート・フィッシャーが提唱するダイナミックスキル理論の法則により捉えることの可能性を考察すること。
- ②筆者が定義してきた読書力を具体化することができるかどうか検討すること。

### 2.2. 研究の方法

「国語」の授業において、筆者が7年間小学校教育の中で実践してきた読書日記(細, 2021)を取り入れる。この読書日記を書く活動は、筆者が定義している読書力に基づき、年間を通して行う読書活動である。これまで小学校の各学年における実践で、筆者が質的評価を取り入れた読書力評価を行うことにより、児童の読書意欲・読み方のみならず読書習慣の育成や自己評価が可能となったものである。

大学においても、この読書日記を取り入れ、量的・質的な読書力評価の新たな可能性を探っていく。学生の読み方・考え方・読書習慣の育成を図っていくために、本研究では、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論に注目し、連続的な読書力評価を行っていく。

本稿で学生Aの読書日記を取り上げる理由は、授業で指導したことを素直に受け止めて読書を継続し、質的な変容が顕著に見られた一人だからである。まずこの読書日記により、大学生の読書力の可能性を見出すことができると考える。

学生Aの読書日記の記述については、ダイナミックスキル理論の「能力の成長に関する5つの法則」(p.110)に照らし合わせ、量的・質的に分析する。そして、変容やその可能性から、筆者が定義してきた読書力の中でさらに具体化できるものを示す。

### 3. 筆者が定義してきた読書力

細（2021）では、細（2015）をもとに、読書に関する先行研究の考察により、児童に身に付けさせたい読書力を以下のように示した（p.11）。

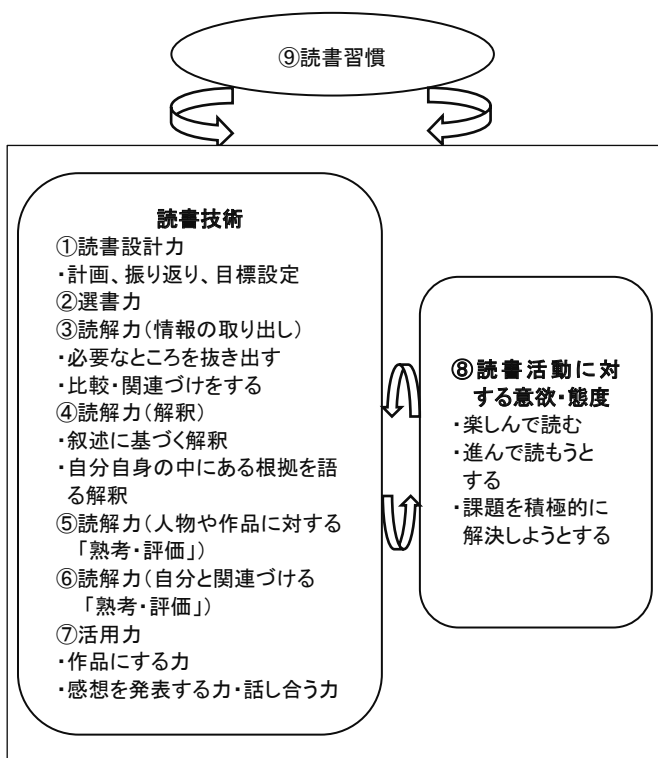


図1 筆者が考える読書力

「読書技術」「読書活動に対する意欲・態度」「読書習慣」は密接に関係していると捉えている。つまり、「読書技術」が身に付けば、自信をもち次に読もうという意欲が高まり、態度として表れる。「読書活動に対する意欲・態度」が育っていけば、様々な学びを吸収しやすくなり、「読書技術」も身に付いていく。「読書技術」と「読書活動に対する意欲・態度」が形成されていくと、「読書習慣」も身に付いていくと考えられる。「読書習慣」が身につくと、本との出会いが増え、「読書活動に対する意欲・態度」や「読書技術」は高まっていくと考えられる。

### 4. ダイナミックスキル理論を大学教育に取り入れる意義

カート・フィッシャーは、ピアジェの発達理論を受け継ぎながら、ダイナミックスキル理論を提唱した研究者である。加藤（2017）は、このカート・フィッシャーの理論を活用し組織人の能力開発や学校教育の改革に適用しているレクティカという研究機関で働いていた。その時に、カート・フィッシャーと

出会い、大学で研究を続けることになり、「能力の成長プロセスやメカニズムに関する概念や理論」

（p.26）を紹介している。加藤は、この理論を「能力開発に応用することのできる重要な洞察を含む実践的な理論である」（p.19）と述べている。

本稿では、加藤（2017）が解説しているダイナミックスキル理論、実践的活用法を日本の大学教育に取り入れる意義として次の4点を挙げる。

#### ① 能力の成長に焦点を当てる

カート・フィッシャーら（2008）では、発達のウェブは、「多様な範囲と多様な方向性をもつ、複雑でダイナミックな構造的プロセスとして成人の認知的発達を描いている。」（p.16）と示されている。加藤は、自分たちの能力が「多様な要因によって影響を受けながら、ダイナミックに成長していく」（p.35）、「他の能力と関係し合いながら成長していく」（p.39）と述べている。これは、決してはしごのように単純な直線を描きながら成長するのではなく、遅滞・退行したり急激に伸びたりしながら成長していくものであることを意味している。また、他者の能力を育成する際にも「能力の成長プロセスとメカニズムを正確に掴んだ上で、適切な支援を提供すること」（p.24）が大事であるとしている。

ダイナミックスキル理論の能力の成長についての考え方を取り入れることの意義は、環境や指導者の指導力、課題により、成人になっても能力の成長は可能であると考えられることである。

#### ② サブ能力に焦点を当てる

加藤は、サブ能力を「一つの能力を構成する小さな様々な能力」（p.75）であると説明している。例えば、能力開発をする際、リーダーシップ能力のように漠然とした概念として捉えるのではなく、「信頼性獲得力」「変革実行力」「ビジョン構築力」「レジリエンス」「組織統率力」「目標達成力」「指導力」「自他成長支援力」（p.77）を特定していくことが最初に求められるとされている。読書においてサブ能力に焦点を当てることにより、身に付けさせたい力を明確にして指導と評価ができる意義があると考えられる。

#### ③ 「点・線・面・立体」の成長サイクルを示す

加藤は、カート・フィッシャーの「点・線・面・立体の成長サイクル」（p.97）を紹介している。具体例として数学力は次のように捉えられている。算数では、最初に数字を「点」として捉える。「線」では、数字と数字を足すようになる。「面」では、数をかけ合わ



せたり割ったりすることができるようになる。「立体」では、四則計算を自由に行う力が身に付く。また、発達段階の移行過程では、次の例が説明されている。「点」では、思考は自分にしか及ばないが、「線」では、相手の気持ちや考えを理解し始め、自分の視点と相手の視点をとることができる。「面」では、自分や他者が置かれている状況を踏まえて、自分と他者の気持ちの様々なパターンを考える。「立体」では、その他の様々な人に対しても様々なパターンを考えられる。このように、「点」から「線」、「面」、「立体」へ移っていく様子は、量的に拡大していくだけではなく、質的にレベルが変容していくと言える。量的評価をすることが多い学校では、このような質的に異なるレベルを明確にし、一人一人の質的成長を目指していくことに意義があると考ええる。

#### ④ 能力の成長に関する5つの法則

加藤によれば、カート・フィッシャーが提唱した5つの法則は、「組み合わせながら次のレベルに成長していく」(p.110)のものであり、「これまで曖昧だった能力の成長メカニズムがよりクリアになるだけではなく、能力を開発する際に、自分が次にどの法則を活用すればよいのか」(p.110)を明らかにすることができる」と示されている。この法則を援用することにより、大学生の変容の過程を量的・質的に評価する方法を見出す意義があると考ええる。

### 5. 5つの法則の概要

加藤(2017)では、カート・フィッシャーが提唱した5つの法則「①統合化、②複合化、③焦点化、④代用化、⑤差異化」(p.111)が紹介されている。各法則について以下に要約・引用する。

#### ①統合化

「今自分が持っている複数の能力が結びつき、現在の能力レベルから新たなレベルへの成長を説明する法則」(p.111)であり、質的な成長を意味する。つまり複数の点が線に、複数の線が面に変わっていくことである。例えば、「考える能力」と「キーボードを打つ能力」が別々に発揮していた状態から、両方を掛け合わせることにより、考えながらキーボードを打つ「ブラインドタッチ」という新たな能力が生まれる。

#### ②複合化

「今自分が持っている複数の能力が現在のレベルの中で組み合わせあって、より高度な能力を獲得する

ことを説明する法則」(p.111)であり、量的な成長を意味する。点や線の数が増えることである。例えば、「聞いて理解する能力」と「理解したことを書く能力」が足し合わさり、「メモする能力」が生み出される。

#### ③焦点化

「ある課題をこなすために必要となる能力を、即座に選び抜くことを可能にする法則」(p.112)である。例えば、チームを率いる場合は、課題の種類によって「リーダーシップ能力」に必要なサブ能力を引き出すことを可能にする。

#### ④代用化

「ある能力を一般化させて他の課題に対して活用する、あるいは他の状況内で活用する際に発揮される法則」(p.112)である。例えば、中小企業でリーダーシップをとることができていれば、似たような業種でもほとんど同じレベルのリーダーシップをとることが可能である。

#### ⑤差異化

「ある能力がより細かな能力に細分化される際に発揮される法則」(p.112)である。これは統合化と同時に起こる。つまり、「能力が統合化によって次のレベルに到達すると、その能力の構成要素のレベルも向上する」(p.131)ということである。

このように、量的・質的な違いが明確になっているメカニズムを援用することにより、指導者は学生が書いた文章の量的・質的変容を評価することが可能になると考えられる。

### 6. 読書日記の実践

(1) 指導期間：2022年4～7月 15回の授業期間

(2) 学年・受講者数：2年・34名

(3) 授業科目：「国語」

(4) 指定した本・著者：『読書のチカラ』・齋藤孝

読書の技法が紹介された本である。この本を選んだ理由は、学生が自分の知識や経験と重ねながら、共感したり批判したりしながら読み、素直な感想を書くことができると考えたからである。

#### (5) 指導方法

①昨年度、学生が書いた読書日記を紹介し、以下の書き方を指導した。

- ・読んだ所までの感想を書けばよい。
- ・書く量は自由である。
- ・短くてもよいので継続して書く。

- ②本の読み方（根拠・理由をもとに自分の考えをもつ、自分の考えと比較する、自分の経験と関連づける、共感・批判する等）を指導し、15回の授業が終了するまでに1冊を読み切ることを確認した。
- ③自分で計画を立てて読み、読書日記を提出させた。
- ④筆者が、学生の感想に対し、できている読み方や考え方、助言等のコメントを書いた。
- ⑤提出された読書日記の中で読み方や考え方について参考になるものを授業の初めに紹介した。

## 7. 読書日記の分析

読書日記を本研究に使用することについては、学生Aの同意を得ている。

本章では、学生Aの読書日記の記述をもとに、従来の量的な評価では捉えられなかった質的な変容をカート・フィッシャーのダイナミックスキル理論の法則によりどの程度捉えることが可能か、これまで筆者が定義してきた読書力を具体化できるかを分析する。

以下、学生Aの読書日記を取り上げ（＜＞内は授業回、読んだ範囲。引用した文章表記は原文ママ。段落番号・下線は筆者による）、適用の可能性がある法則と読書力のサブ能力を示す。

読書日記の「筆者」は著者（齋藤）のことである。

### 〈第1回 p.3～p.16〉

①日本の歌謡曲や J-POP で出てくる「くよくよしないで」「負けないで」等々の歌詞を筆者は月並と言っていたが、私はその月並な言葉だからこそ人間の心に刺るのではないかと考えた。

②私は読書時間よりも twitter やブログのインターネットでの情報を見る時間が多い。これから少しずつ、twitter やブログではなく読書の時間を増やしたいと思う。また読んだだけで満足しているがきちんと内容を理解し最後まで読み切る読書をしていきたい。本当に読書の時間を増やす精神力を鍛えられるのか疑問な気持ちになったのでそれを確かめるためにも読書が続けてみようと思う。

①では、本文の言葉を根拠にして自分の感想が書かれているが、具体的な理由はない。②では、著者の考えを素直に受け入れているが、①と同様に理由は述べられていない。自分の読書を振り返ることはできており、読書に対して前向きな気持ちを表している。また、疑問を解決するために読書を継続していきたいという意欲をもっていることが分かる。

### 〈第2回 p.26～p.33〉

③私は読書をして感じたことやひっかかったことが2つあった。1つ目は「一生の仕事をゲットするためだから、1日10時間の勉強はしろ」という部分が心にひっかかった。また、筆者はこれはオーバーではないと言っていた。確かに最近の学生は勉強時間は少ないかもしれないが10時間勉強するのは無理があるのではないかと考えた。しかし、10時間勉強するつもりのやる気を持つてということではないかとも考えた。

④2つ目は、前田健太投手が入団当初に「プロでも驚くようなことはなかった」という発言である。私は環境が変わると緊張感、不安、プレッシャーに押しやられて驚くどころか泣いてしまうと思う。しかし前田投手は自信にあふれた発言をしている堂々さに心を打たれた。私は、読書を通し精神面を鍛えていきたいと思う。そのためには様々なジャンルの本を読まなければならないのかと考えた。

⑤今回読んだ箇所は疑問に思うことが多く受け入れることが難しい文章であった。

③の下線部では、単に著者の考えを批判するだけではなく、その考えを受け止めた上で著者の立場で考えている。それは1回目①とは異なり、解釈をしている。④では、自分と人物を比較しながら、精神面を鍛えるための読書を考えている。齋藤(2015)が読書の意義の一つとして「自分を鍛え、精神を豊かにする」(p.47)を挙げているように、様々なジャンル（ミステリー、ノンフィクション、エッセイ等）の本を読むことにより精神力を養うことができれば、新たな能力が生まれることになるため、「統合化」が起きる可能性がある。また、人物と自分を比較する力と人物に対する考えをもつ力により、自分の今後の在り方を考える力が表れている。これを法則に当てはめると、人物について考えるだけでなく自分自身のことも考えるようになる、視点が広がるという意味で、点や線の数が増える「複合化」が考えられる。人物と自分の共通点や相違点を捉える力、自分の在り方を考える力は筆者が定義する読書力の読解力（自分と関連づける「熟考・評価」）である。⑤は、批判的に読む方法を学んだことによるものだと考えられる。

### 〈第3回 p.34～46〉

⑥この章を読んで疑問に思ったことが2つある。1つ目は、作者が言う一流の人物とはどのような者なのか疑問に思った。疑問に思ったので“一流”という言葉

の意味を調べてみた。スーパー大辞林によると一流とは『優秀。優良。またそのようなものや人。最も優れた部類に所属すること』とあった。人によって一流かどうかの基準となるものは異なると思う。一流の人物と人をランク付けする必要はないのではと思った。私は一流の人物という表現方法や書き方はなぜか受け入れることができなかった。2つ目は作者は「質の良い本」と言っていたがこの質の良し悪しは何を基準にしているのだろうかと思った。(中略)批判することが沢山ある。

⑥では、第1回、第2回に比べると、内容を共感的に読むだけではなく、抽象的な言葉の意味を調べるにより、下線部のように批判的に読むことができています。これは、読解力(人物や作品に対する「熟考・評価」)である。また、授業で紹介された友達の読書日記の表現に注目したかどうかは不明だが、⑥の文章の最後に「筆者は「～」と述べている。共感した。その理由は～だ。」と青文字で加筆していた。

#### 〈第4回 p.47～p.54〉

⑦私は今回、読書をして感じたことが2つあった。1つ目は、筆者が「一人の時間を読書で満たすことができれば孤独を感じることも少なくなる」と述べていた文に私は感銘を受けた。私が高校生の時、クラスメイトであるAさんは突然学校に来なくなった。(中略)私は「大丈夫?」「無理せずにね。待ってるね」と心配や励ましの内容のメッセージを送った。Aさんはしばらくして学校に来るようになった。すると、私の友人Bさんに向かって「あの言葉に救われた。ありがとう」と言っていた。私は、あの言葉とはどんな言葉なんだろうかと不思議に思いBさんに聞いてみた。Bさんは「立ち直るまで時間がかかると思うから、それまで本を読んだら?」しか言っていないよ。」と言っていた。その時私は、「Bさんの言葉ってそんなにパワーとなる言葉なのか?」「AさんはBさんにどんな魔法をかけたんだ」と不思議でいっぱいであった。私は、この本を読み、Aさんは一人の時間を読書で満たし、うまくいかなくても大丈夫という心の支えになり寂しさを軽減できたから立ち直ることができたのではないかと考えた。私は、当時の不思議でいっぱいだった疑問が解決できた気がする。(中略)今まで読んだ所は批判的に捉えてしまうことが多かったが、今回は肯定的に捉え共感する所が沢山あった。

⑦では、⑥の最後に加筆した書き方を活かし、具体的な理由として自分の経験を挙げている。第1回目には疑問を解決するための読書を目指していたが、ここでは、感銘を受ける一文に着目する力と、自分

の経験と重ねる力を結びつけることにより、著者の考えに納得し、自分のこれまでの疑問が解決されている。これは自分の考えに説得力が加わるという意味で「複合化」に当たると考えられる。

#### 〈第6回 p.54～p.66〉

⑧私はこの文章を読んだが話の内容を理解することが難しかったため同じ箇所を2度読み直した。最初に読んだ時、全くとって良いほど理解をすることができなかった。2回目に読んだ時、何となく筆者の言いたいことが伝わり少しおもしろいと思いう一度読んでみようと思えるようになった。3回目に読んだ時、自分の考えと経験を照し合わせて読むことができた。

⑨筆者は、「音楽の役割が肥大化しすぎている感がある」と述べ音楽を批判していたが、音楽には音楽なりの良さがあると思う。病気を治したり、不安や痛みを和らげるためにも音楽を聴かせたり演奏させたりする音楽療法というものがあるくらいであるから、音楽の役割は肥大化しすぎても良いのではないかと思った。若者が読書より音楽に頼り過ぎていることに筆者は嫉妬心を持っているのではないかと考えた。

⑩私も筆者と同じように大学入試に向けた勉強を本格化させなければならない時に百人一首の沼に入ってしまった。人間というものは何か始めなければならない時に、それとは別のことを新しく始めてみようとする生き物なのではないかと考えた。

⑪筆者とは価値観が合わず、違う世界で生きているような人だと感じるが多かったが、この文を読み自分と似ている所がある人だと感じ距離が縮まった気がする。

⑧では、理解するために、読み直すことや自分の考え・経験を照らし合わせることを自分で選んでいるため、「焦点化」だと考えられる。⑨では、第1回とは異なり、下線部のように他の事例を理由にして批判的に読んでいる。理由付けの仕方が増えるという意味で「複合化」が見られる。⑩では、下線部のように著者と自分との共通点から「人間というものは」というように一般化した思考を用いている。

これまでは、1回の読書日記で共感または批判をしていたが、第6回では、⑨で批判し、⑩で共感することにより、⑪の下線部のように、自分と比較しながら著者に親近感をもつようになっている。このことから、自分の知識や経験と比較しながら共感したり批判したりすることを繰り返すことにより、著者を多面的に捉える力が身に付くと考えられる。文章の



内容を理解することから、自分とは異なる考え方や価値観をもつ他者を理解することへと変容するため、「統合化」が起こる可能性があると考え。

#### 〈第7回 p.64～p.76〉

⑫私はこの本を読み考えたことが2つある。1つ目は、筆者が「「自分には無理」と諦めているが実はそんなことはない。意外とスラスラ読めることが喜びになり、また刺激にもなる」と述べている所に、共感した。私はこの読書のチカラを読む前に「絶対に面白くなさそう。読めるワケがない」と思い読まされている気分ですしづつ読んでいた。しかし、今は理解できるまで繰り返し読んだり自分の考えを持ちながら読んだりしている<sup>①</sup>。今は読まされている気分で読んでいるのではなく、読みたいと思い自らこの本を読んでいる。無理と思っていたが半分近くページをめくり読めている。きっとこの先、大きな壁にぶつかった時、無理と思うけれど、そんなことはない<sup>②</sup>と心の中に言い聞かせてどんな大きな壁でも越えてみせたいと思う<sup>③</sup>。

⑬2つ目は「新聞は強力なアンテナになり得る」と筆者が述べていた所に共感した。私はこの本を読んで本当に強力なアンテナになるのかと思い、2日程新聞に目を通してみた。すると、興味ないはずの科学、医療について書かれていた記事に目を通していった。新聞によって新しく知識を吸収でき、興味を引き出してくれるから本当に強力なアンテナなんだと感じた。この本を読み私は新しく興味があるものを見つけ出し新しいアンテナを張ることができているような気がする。

⑫の下線部①では、理解しながら読む力と自分の考えを持つ力により読み続ける力が身に付いたことが分かる。これは「統合化」であると考え。下線部②では、読めないと思っていた本を読み続けることができているという達成感から、今後の生活場面でも乗り越える力を活用しようとしており、「代用化」が起こる可能性がある。⑬には、読んで共感したことを実際に試すという活用力、興味のなかった科学・医療の記事を読むことに挑戦する力が表れている。これらもサブ能力であると考え。

#### 〈第8回 p.73～p.93〉

⑭（略）3つ目は、内容を確認せずに買うタイトル買いの危険さに共感できた。私は、絵本、小説どちらもタイトルだけをみて買い、話の内容に面白さを感じることなく読むことからシャットアウトしてしまった経験がある。レビューなどを見て、面白そうと感じ買った本はどれも最後まであきることなく読み切った覚えがある。しかし、レ

ビューにも危険があるのではないかと思った。例えばその本の点数をたった一人の読者しかつけていなかった場合その読者のみの点数がレビューに影響されるのではないかと思った。私は「レビューを見て実際に書店に行きその本に目を通して買う」これが本選びのコツではないか考えた。

⑭では、選書について考えている。レビューを見る力と書店で本をめくって確かめる力により自分に合った本を選ぶ力が身に付くと考えられることから「複合化」が可能である。この選書力は読書をするための重要なサブ能力である。また、この回では、筆者に対し、「面白いと感じた作家さんは誰でしょうか」と問う記述が見られるようになった。つまり、本を通して人とつながろうとする姿勢が見られたのである。このことから読む力と書く力が組み合わさることにより、人と交流する力という新たな力が生まれ、「統合化」が可能になると考える。

#### 〈第10回 p.114～p.122〉

⑮私は読書をして感じたことが2つある。1つ目は、筆者が「1000冊程度の本すら読んでいない人が作家になろうとすること自体、あり得ない。最低でもそれぐらいは読まなければ、とても日本語に習熟したとはいえないからだ」と述べていた文に共感した。私が面白いと思った本の作家さんは、言葉の表現力が面白く、私の知らない言葉を使っている。また、作家さんについて調べてみると沢山の読書をしている。面白く質が高い作家さんは読書を通して沢山の言葉を理解しているのではないかと考えた。2つ目は、筆者や作家の山田詠美さんは、「小説を書くのは世界文学などを詠み込んでからにして」「この程度のことさえわかっていないヤツが書くなよ」と述べていた文に彼らは小説家というプロフェッショナルのハードルを低くしてほしいという願いが込められていたのではないかと考えた。小説家としてのこだわりを強く持っているのだと感じた。何だか最近、『読書のチカラ』を読むことが好きになってきた。楽しくなってきた。

⑮からは、文に着目して共感して読む力、本の内容に関連して調べる力、著者の考えを読み取る力と書き方が定着したことにより、下線部のように、指示された本を読むことに対して肯定的な思いをもつようになった。これは「統合化」の現象であると考え。

#### 〈第11回 p.123～p.136〉

⑩私は読書を通して感じたことが2つある。1つ目は、古典を読むコツを筆者が述べていてこの本にもっと早くから出会っておけば良かったなと思った。私は、古典を読むことが苦手だったためなかなか手を出すことが出来なかった。源氏物語に興味があり読みたい気持ちでいっぱいだったけど難しすぎて諦めてしまった。この読書を通して古典を読むコツを知ったので源氏物語に再チャレンジしてみようと思った<sup>①</sup>。

⑪2つ目は、問いを立てながら読んでいなかったことに気がついた。筆者のように文章の中に「～か。」という問いかけが出てきたらマーカーを引くようにしようと思った<sup>②</sup>。せっかく買っている本を真っ白のままにするのではなくマーカーを引き問いを立てたり考えながら読むようにしたい。筆者は文章の中に問いかけが出てきたら山カギで括弧のようにしていたが、これは紙の本の良い点だなと思った<sup>③</sup>。

⑩の下線部①と⑪の下線部②では、読み方を理解することにより、それを活用したいと述べられている。他の課題や状況で活用できるようになれば、「代用化」が成し遂げられる。⑪の下線部③では、紙の本の良さを理解している。この力も読書の重要なサブ能力だと考えられる。

#### 〈第12回 p.137～p.151〉

この回では、素読と音読の違い、国語科教科書の中の昔話について書かれていた。その他には、第8回と同様に、余白に「先生が一押しする教科書の物語は何ですか？私はやまなしです。宮沢賢治のやまなしの世界観が幻想的でとても好きです。」と書かれていた。読書日記を書き続けることにより、本を通して人と交流しようとする気持ちが起こり、「統合化」が可能となっている。

#### 〈第13回 p.145～p.172〉

⑫私は読書を通して感じたことが3つあった。1つ目は、筆者が読んだ本を忘れないように背表紙の効用について述べていたがこの方法は是非真似をしたいと思った。私は読んだ本は、読んだ順にボックスに収納している。古い本は奥に、新しい本は古い本の前へと収納している。「この本を読み返そう」と思った時に限りいつも本をどこに片付けたのか分からなくなる。だから筆者のように奥に単行本、手前に文庫本と収納するようにしたい。自分の記憶装置をコンピューターのように大きくしていきたい。

⑬2つ目は、筆者は読書をするのに喫茶店を利用することを勧めていたが私はその考えには納得できなかった。

た。私は以前、読書をするには、本以外のものを目に入らない環境を作るという記事を読んだことがある。喫茶店では、食器の重なる音や人が目に入り読書に集中することができず自分の世界に入り込むことはできないのではないかと考えた。しかし、人には自分に合った環境は異なるため自分に合った読書空間を作り自分の世界に入っていくことが大切なのではないかと考えた。

⑭3つ目は、筆者が勧めていた「読書会」に共感した。授業でこの課題図書を読んで感想を伝え合った時、自分とは違う捉え方や友達の世界観を知ることができた。またこの読書会では相手とコミュニケーションを取るためコミュニケーション能力の向上や読書が習慣し今まで以上の知識を得るという利点もあるのではないかと考えた。

⑮では、自分の体験をもとに、本の収納の仕方について、⑯では、自分がこれまで読んだ記事をもとに本を読む環境について自分の考えが書かれている。本を収納する力、自分に合った読書空間を作る力等の読書環境を作る力も読書力のサブ能力であると考えられる。⑰では、読書会の利点を捉えるようになっている。この力もサブ能力であると考えられる。読む力と書く力、人と本について話し合う力が組み合わせられることにより、読書の習慣が身に付けば、「統合化」が起こると考えられる。

余白には以下のことが書かれていた。

辻村美月さんの「かがみの孤城」と言う本をお時間が空いた時に読んでみてください。主人公の心の模様が丁寧に描かれていて物語の世界にグイグイと引き込まれます。

・先生にとって読書をする時、最も集中できる空間はどこですか？

・先生のオススメの絵本は何ですか？私は、「ショートケーキになにのせる？」という絵本がとてもファンタジーで面白く好きです。先生にオススメして下さった「クシュラの奇跡」という本を先日から読み始めました。(後略)

ここでは、筆者との交流を求めている。また、筆者が以前紹介した本（重い障害をもって生まれた子どもの記録）に関心をもち、読み始めたことが分かる。このように、読書について人と交流する力や人から紹介された本を読むことに挑戦する力は、サブ能力と考えられる。

#### 〈第14回 p.166～p.193〉



②私は今回、読書をして感じたことが2つある。1つ目は、読書には沢山の読み方があるということを知った。私はいつもその本の世界に入り込みたいため、ひたすら文章とにらめっこをするように読んでいる。そのため読み終わるのが遅い。これから沢山の本を読んでいきたいと思うので快速読みに挑戦してみたい。しかし、本の内容や世界観によっては快速読みは向いていないものもあると思う。本の内容や筆者が大切にしている世界観に合っている読み方を自分で見つけ挑戦していくことが大切だと考えた。その本に適した読み方を見つけることも上手に読書をするための上達の1つの方法ではないかと考えた。

②2つ目は、筆者が「この本を読んだ今の人生と読まなかった人生は、確実に違う」と述べていた文に感銘を受けた。私はこの本を読み始めた頃、仕方なく課題のひとつだからという思いで読んでいた。また、どうせ面白くないから最後まで読み切れなだろうと思っていた。しかし本を読むにつれ、共感できる点や否定点も考えることができるようになった。また、自分に合った読書スタイルを見つけることができ面白いと感じるようになった。1冊読み切った達成感と嬉しさはテストで100点を取った時のように大きかった。私はこの読書で、興味がなかった本を最後まで読み通すことができたので少しだけ自信がついた。読みたいと思った本はもちろん、筆者が紹介していた本も挑戦していきたい。この本は色々な方向からアンテナを立てることができる本であったと感じた。

③私は毎週、必ずこの本を読み感想を書くことが楽しかった。これで終わりだと思うと少し寂しい。夏休み中は毎日、新聞のエッセイ「天風録」をノートに書き写し感想を書くようにしてみようと思う。(後略)

②の下線部では、本によって必要な読み方を選ぶようになっていることが書かれており、「焦点化」が起こる可能性があると考えられる。②の下線部では、1冊の本を読み通すことにより自信がつき、次の読書へ挑戦しようとしている。読み通す力と自信をもって読書に挑戦する力も読書力のサブ能力であると言える。また、読み方を理解する力と自分の読書スタイルを考える力が組み合わさることにより、1冊を読み通す力が習得されたため、「統合化」が可能になったと考える。③には、新聞を読むことにおいて本の読み方や感想の書き方を活用したいという思いが表れており、「代用化」が起こる可能性がある。

## 8. 本研究の成果と課題

### 8.1. 成果

学生Aの読書日記の記述から、新たな能力レベルへ質的に変容する「統合化」、新しい種類の能力を生み出し量的に変容する「複合化」、必要な能力の選択を行う「焦点化」、能力の活用を行う「代用化」が起こる状態とその可能性を捉えることができた。加藤(2017)では統合化が成し遂げられるためには多くの時間を要するとともに、突如飛躍する状態になる場合もあるとされているが、本研究では、前期に継続的に読書日記を書いた結果、統合化が起こる状態も捉えることができた。カート・フィッシャーの法則に照らし合わせることで、能力の組み合わせに注目することにより、学生の感想の量的・質的変容を捉えることが可能であった。

学生Aの場合は、前期「国語」の授業での読み方指導、読書に関する本の指定、家庭で継続的に書く読書日記、筆者によるコメントにより、多様な変容が起こったと考えられる。

また、評価する中で、読書力に必要なサブ能力は何かということも明確になった。学生Aの読書日記から、筆者が定義していた読書力がさらに具体化され、以下のサブ能力が見出された。前述の図1「筆者が考える読書力」に当てはめて示す。

#### 読書技術

##### ①読書設計力

- ・自分に合った読書スタイルを見付ける。
- ・読書環境をつくる。(収納、読書空間)

##### ②選書力

- ・レビューを見て本屋に行って確かめ、選ぶ。

##### ③読解力(情報の取り出し)

- ・感銘を受ける文、疑問に思う文に着目する。

##### ④読解力(解釈)

- ・他の事例を理由として自分の考えをもつ。
- ・著者の立場で考える。
- ・抽象的な言葉に着目して自分の考えをもつ。
- ・一般化して考える

##### ⑤読解力(人物や作品に対する「熟考・評価」)

- ・著者の性格や考え方を多面的に捉える。
- ・著者の考え、表現を共感的・批判的に読む。

##### ⑥読解力(自分と関連づける「熟考・評価」)

- ・自分のしたことだけでなく、自分の周りの人の出来事とも関連付ける。

##### ⑦活用力

- ・共感したこと、理解したことを実際に試してみる。
- ・習得したことを他の本や場面で活かす。

##### ⑧読書活動に対する意欲・態度

- ・これまで興味のなかった本や新聞記事、紹介された本を読むことにも挑戦しようとする。

- ・様々なジャンルの本を読むことに挑戦しようとする。
- ・自信をもち、次の読書に挑戦しようとする。
- ・1冊の本を読み切る。
- ・本や読書活動の良さを理解する。
- ・著者に対する親近感をもつ。

その他

- 本の内容や課題に応じて必要な力を選び出す力
- 本を通して人と交流する力

本研究で取り入れた読書日記は、学生Aが読み方を理解し活用するとともに、読書の良さを感じ、読書習慣を身に付けていくことを促す読書活動であった。

## 8.2. 課題と展望

本稿では、学生Aの読書日記のみ取り上げたため、5つの法則がすべての学生に適用できるかどうかまでは分析できていない。また、「大切だ」「……したい」という思いにとどまり、「焦点化」「代用化」が一般的に成し遂げられることについては十分確認ができなかった。今後、様々な実態の学生を対象として、能力の組み合わせ方、変容を分析していく必要がある。

また、本稿では、感想の記述内容の変容を中心に分析したが、今後は、学生Aのようにナンバリングを使うだけでなく、本の内容に応じて自分の感想の書き方を柔軟に考えられるように指導し、記述内容と表現の両面から変容のプロセスを分析していきたい。

学生が読む本については、次の段階で、複数の選定した本から学生が選べるようにしていきたい。最終的には自分で本を選ぶことができるようにする。

5つの法則の中では、「統合化」と同時に起こると言われる「差異化」を見出すことや「統合化」「複合化」の違いを区別することの難しさがあったが、今後、長期のプロセスの中で5つの法則を参考にすることにより、一人一人の量的・質的な変容を捉える視点が明確になると期待される。そして、それを指導者と学生が共有することにより、次に目指すこととそのため必要なことを予測していくことが可能になると考える。

## 【参考文献】

足立幸子 (2020)「交流を生かした読書指導：パートナー読書In2Booksの日本における試み」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』12 (2)、pp.121-142

Kurt W. Fischer Zheng Yan Jeffrey B. Stewart

(2003) Adult Cognitive Development :

Dynamics in the Developmental Web in

Handbook of developmental psychology カート

・W・フィッシャー、ツェン・ヤン、ジェフリー

・スチュアート (共著) 中川恵里子 (訳)

(2008)『成人の知的発達のダイナミクス 発達ウェブからのアプローチ』丹精社

加藤洋平 (2017)『成人発達理論による能力の成長ダイナミックスキル理論の実践的活用法』日本能率協会マネジメントセンター

厚生労働省編 (2018)『保育所保育指針解説』フレーベル館

齋藤孝 (2015)『読書のチカラ』大和書房

篠崎祐介、鈴木美穂、富士池優美、北原博雄、中田幸司 (2022)「大学初年次生への読書指導法の探究－会話の分析を中心に－」『リメディアル教育研究』16 (25)、pp.169-178

東城大輔、井岡瑞日、末次有加、深田直子、金重利典、高田昭夫 (2022)「保育士・教員養成校における初年次教育のあり方について－読書カードを活用した取り組みを中心に－」『大阪総合保育大学児童保育論集』1、pp.65-82

橋本信子 (2017)「読書推進教育における図書館および書店との協働－流通科学大学初年次科目「文章表現Ⅱ」の取り組み－」『流通科学大学高等教育推進センター紀要』第2号、pp.49-60

細恵子 (2015)『児童の読書力を形成する「読書日記指導」の理論と実践』学位論文、広島大学

細恵子 (2021)『児童の読書力を形成する読書日記－読書指導法の改善と個の変容を目指して－』溪水社

牧恵子 (2015)「愛知教育大学国語・書道専攻「初年次演習」の実践報告2014－読書指導と対話を重視して－」『教養と教育』15、pp.37-45

峰本義明 (2022)「自由読書が学生の読む力に与える影響－通年の自由読書授業の実践を通して－」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』142、pp. 245-248

文部科学省 (2018)『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』東洋館出版社

山田陽子 (2013)「共通科目「読書入門」の授業研究－テキスト「星の王子さま」を通して－」『十文字学園女子大学人間生活学部紀要』11、pp.135-149